

をもっている。最初に近世後期のこの地域の研究の共通する問題意識が「日本における産業資本の自生的展開」資本主義成立の芽をこの地域農村の動向に求めようとしている点」にあるとし、これを農民闘争と農民の階層分化と地主制の二点にしほつて問題点を中心として整理している。

以上、紙数の関係できわめて簡単な紹介におわり、各論文の内容の紹介すら不十分なものとなつてしまつたことを執筆者をはじめ読者諸氏におわびしなければならぬ。さいごに巻末の「撰河泉州農民闘争年表」と「撰河泉史文獻」は今後この地域を研究する者にとつてきわめて便利であることをつけ加えておく。(A5判五九四頁  
昭和三十五年十月 吉川弘文館編 定価一、二〇〇円)

別技篤彦著

東南アジア諸島の居住と開発史

石川 栄 吉

東南アジア研究の重要性ということが、しばしば語られている。事実、ここ数年の間に、諸大学あるいは民間にも、数多くの東南アジア研究の機構、もしくはグループが形づくられてきている。日本の置かれてある文化的・社会的・地理的環境に照らして、このような動きは当然というよりも、むしろ遅きに失したとさえいえよう。敗戦の結果した止むをえぬ事態であつたにせよ、この間に研究上のいちじるしい遅れをとつたことは、まことに残念なことであつた。この地域がながらく欧米諸国の植民地体制下に置かれていたためとはいえ、欧米諸学者の研究に、なお多くを依存しなければならぬ現状は、まだ当分続くことであろう。

このような、東南アジア研究の一般的状況下に、別技篤彦教授の二十年にわたる本地域の研究成果『東南アジア諸島の居住と開発史』が世に送られたことは、まことに喜ばしいことであつた。著者別技教授は、太平洋戦争中、約三年半の歳月を、インドネシアの現地調査に費やされ、この間、バタヴィア(現ジャカルタ)のオランダ王立自然科学協会図書館を研究室として、文献研究を進める一方各地の実地調査を併行して、多くの貴重な資料を蒐集された。その大半が、敗戦・引揚に際して失なわれたということは、我々もまた

別技教授と共に深く悲しむものであるが、教授はその痛手にもめげず、戦後直ちに資料の再蒐集に着手され、次々と学界へ研究成果の報告を送りだされた。これはなまなかなな努力で果たせるものではない。それは大戦中の浮薄な南方ブームとも、また近年ようやく興つた東南ア研究の機運とも無縁な、教授のこの地域にかけた執念ともいえる学問的情熱の所産であつた。今、多年にわたる研究の成果を一巻に集成されて、教授の感慨は一人のものがあるが、われわれもこの地域の研究者の一人として、そしてまた蔭ながら教授のこれ迄の御苦労を知る者の一人として、本書を得たことを深く喜びとするものである。

さて、著者の序言に従えば、島嶼は一般に「人間の環境としての自然の作用がもつとも強く把握されるのみならず、空間の限定性に伴う人間活動の諸形態があらゆる生活部門を通じてきわめて明確な姿をもつて顕現」するところである。したがつて、環境と人間との交渉過程を理解する上で、島嶼はすぐれた舞台となることができる。マライシア島嶼圏は、著者により、かような考察を試みる為の素材として選ばれたのであつた。しかし、著者は、マライシアを、単に右に述べたような、素材的意義においてのみ、とり扱かつているのではない。このような素材的扱ひを通じて、究極においてはこの地域の地域性を解明することが、別技教授の目的に他ならぬのである。

地域性、それは環境と人間との交渉を通じて形成をみる。

右の様な目的をもつてマライシアにのぞむ著者の方法は、主として歴史地理学的なそれとして特徴づけられよう。本書の題名に端的

に示されているごとく、居住「開発の歴史過程の分析の中から、目的に接近しようとする方法である。したがつて、何か後進地域の開発問題といつたような、経済地理学的もしくは応用地理学的関心をもつて本書に接したとするならば、本書は必ずしも直接的な形では、その期待に応へはせぬであらう。だが、それにもかかわらず、そこには過去の分析を通じて未来への貴重な暗示が与えられているはずである。

本書は三編から構成される。第一編マライシア島嶼圏の地理学的認識の歴史。ここではブトレマイオス以後の、欧人の手になる地図を資料に、マライシアの、科学的認識に至るまでの経過が追求されると共に、近代における本地域の地理学的研究史が概観されている。広く文献を渉猟し、十六世紀末のローデウィクスの「航海記」を初めとする、各種旅行記から始めて、ユングフーン、フェットに代表される植民地時代の諸研究、さらに戦後最近に至るまでの研究史が述べられる。これは、われわれ後進にとつて、有益な展望を与えてくれるものである。しかし欲をいへば、記述がともするに annotated bibliography の程度に終始して、従来どの点までが解明され、今後いかなる問題があるのか、という点で不明瞭さを残しているのが惜しまれる。たとえば、フェットの業績にしても、彼がジャワのリッターとも称される、すぐれた人文地理学者であつたと聞かされるだけでなく、今少し立入つて業績内容を紹介批判していただけたら、と思うのである。

第二編 マライシア島嶼圏における海上交通史の地理学的研究。

東方世界と西方世界、さらに濠亞兩大陸の接点に位置するマライシ

アは、太古以来民族・文化の十字路として、特異な役割を果たしてきた。この地域の、まれにみる複雑な民族構成が、もつともよくこのことを物語っている。この経過を実証的根拠の上に理解しようとするならば、それは当然、交通地理学的な分析に導かれねばなるまい。このような意図にもとづく本編では、いわゆる南海に関する中国資料をはじめ、各種の航海記と、本地域の気象状況・海流・水深などの自然地理学的諸条件の分析とを経緯として、本地域とインド方面・華南方面・フィリピン方面との交通路が、具体的に推論される。推論には違いないが、のつびきならぬ交通地理学的条件を支柱としたそれであるだけに、たとえば南海史の地名考証にしても、独特の強みをもつものであることは確かである。著者は、とくに「東西洋考」について、このような立場からの地名考証を試みている。本編は南海史家や、この地域の民族学的文化史を専攻する者にも、益するところ大きいと思われる。

第三編 マライシア諸島における居住と開発の地理学的研究。紙数においても本書の半ばを占めるこの章編は、本書の核心部を構成する。さきに触れた通り、歴史地理学的方法に依拠する著者は、その際、人口分布を分析の重要な指標として用いている。人類の空

間的拡張を人間の一般的生活現象として扱えたラッセルの伝統を、われわれはここに見ることができよう。マライシアにおいて異常なまでの人口集積をきたしたジャワが、考察の中心に置かれるのは当然である。ジャワはまた、著者の最もながく滞在された土地でもあった。熱帯的自然環境と火山島としての諸条件、その枠に適應しつついかに人間の営みが拡張されて、今日みる人口集積をきたしたのか。先史遺跡・遺物の分布から考察は始まり、ヒンズー王朝時代、植民地時代へと筆は進められる。工業化以前の土地がらであつてみれば、当然農業の開発が中心となるが、著者の目はつねに人間の居住という事実焦點をあわせられ、単なる開発史もしくは農業地理学的研究に終ることがない。人間と環境との交渉、それを人間の居住の拡大過程という視点に絞つた著者の立場は、見事に本書に一貫しているのである。豊富な文献の駆使もさることながら、何といつても現地調査に裏つけられた強みが、本書の価値を一層高からしめている。著者に対して失礼な評言かとは思ふが、本書を一読しての素直な感想は、これがつけやきばではない、いかにも年期的に入つた作品である、ということに尽きよう。(A五判 三三三頁 一九六〇年一月 東京古今書院刊 定価六五〇円)